
千の代わり～君が居た～

ひのき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千の代わり／君が居た／

【Nコード】

N9513E

【作者名】

ひのき

【あらすじ】

幼かった子供は走る。その先に大きな失望が有ると判れば目を塞いで、口を噤んで。大好きな君。身勝手な俺。君の姿が見えなくなるのは、嫌なんだ。————妖怪と人間の、ちょっと悲しいお話。

第一話（プロローグ）

少年が走る。

暗い森の奥。丑の刻に、ひとつの亀裂が走る。

（ごめんなさい、ごめんなさい）

その小さな腕に派手な絵羽織を抱えて、その小さな頭の中では、大きな大きな恐怖を抱えて。誰か誰かと彷徨う姿は迷子の様。ああ、だけど、ほら、後ろから付いてくる。

沢山恐いのが、付いてくる。

『返せ…返せ…』

実態の無い木霊が響く。あまりにも驚いてしまって、思わず転んでしまいそう。

『タキ…待って…』

泣きそうな声。

（ごめんなさい）

歩を進める中で何度も思った。ごめんなさい。だけど、言えない。だって、そう言って戻ったら、君は消えてしまうじゃないか。

『タキ…』

ごめんなさい。

大きな川が流れる傍で、その男は昼寝をしていた。

「起きてタキくんっ」

小さなものが乗っかかってくるのが判る。あまり重いわけではないけど、ぶつかる衝撃に、呼ばれたタキは目を覚ます。

「：何だい、千代。」

ゆったりと欠伸をして未だ背中につく少女に問う。

「何って、もう早くしないと日が暮れちゃう！」

若干赤みが差してきた空を指して言う。タキはそんなこと、と一蹴したけれど、その子があんまりにも訴えるもんだから、やれ仕方ないと支度をする。

二人は旅人であった。

兄弟ではない間柄、何時から一緒かと聞かれれば、野暮だと答える。聞いたやつはじゃあ、と趣向を変えて言う。お前の子か。そうすると決まってタキは答えた。

『逆だな。子供が俺の親のようなもんさ』

子供に尻敷かれる男かお前は。そういうと必ず言った。

『勿論違うさ』

最終的にははぐらかして、何も言わずに次の村。ああ、聞き忘れたことがあった。

お前達がしてるのは、何の旅？

あてどない。何も得ず、何も失わないための旅だ。変わることを願わず、ただ、唯一の恐怖から逃げる旅。この旅に、終りは見えなかった。

「タキくんっ 早く早く！」

「はいはい」

ただこの千代と、もっと一緒に居たいだけ。

第二話

村に着いた頃にはもう、空なんて真っ暗。辺りは虫の息使いさえ聞こえぬ夜中。

「もうっ やっぱり暗くなっちゃった！」

泊めてくれるところ、あるかしら。不安げに呟く千代の頭を撫でて、大丈夫だよと言う。そうすると千代は少しタキを見据えて、ちよっただけ手を握った。

「適当な家を見つけないきゃな……」

村の中心へ歩を進めると、タキはそこで何かに気づいた。突然止まったタキの目線を辿った千代もまた。

「タキくん、あれ、人よね？」

「うん：こんな時間に何してるんだろう」

見えたのは、いそいと森の方へ向う、十四、五あたりの少年であつた。黒い髪束をひとつに結って、農民独特の、継ぎはぎのような服をきたその少年を目で辿るが、やがて本当に森の奥へ行ってしまったので、辿るのを止めた。

少しの間は奇妙な余韻に浸っていたが、やがて自分たちに寝る場所が無かつたのだと思ひだすのに遅くはなかつた。

そこで見つけた一軒の家。家の中の明かりが洩れていた。

出来るだけ不躰にならぬよう、きちんとしてから軽く入口の壁を叩いた。

「ごめんください」

中から人が表れる。四十代そこそこの男だ。

「何の用だい」

じろじろと、いぶかしむ様子で問う男。

「すみません、旅の者なのですが、今晚だけ泊まらせて頂けませんか

か」

ちら、と千代を見る。それから男はまた家の中に入って、代わって出てきたのは明るい女性だった。

「あらあ、子連れさんなの？ どうぞどうぞ、いらっしやいな！」

同じく四十代そこそこに見える、肝っ玉の据わった女性だ。

「まあまあ！ 可愛い子ねえ、ほらこっちおいで」

少しだけタキの後ろに隠れていた千代を、タキは女性の前に追いやって、「ほら、挨拶だよ」と促す。ちよっとだけ躊躇って、耐え切れずにはにかんで、そして強く頭を撫でられた。

「貴方達、ご飯はもう食べたの？」

「あ、いいえ……」

「えええ？！ まだ食べてないの？ じゃあ今から残りもので作るから食べなさい！」

いきなり捲し立てるように言うものだから、驚いて小さい声で「はい」と言ってしまう。二人を放っておいて、女性は台所に向かったようだ。その場に残された二人はどうすれば良いのか判らずに立ち呆けていたが、やがて聞こえてきた「あ、勝手に入ってきて良いわよー」という女性の声に甘んじてそうすることにした。

第三話

「はい、これ鶏肉を炙ったものね。これは山菜と御飯を交ぜたもの。とうもろこしもあるわよ？あ、飲み物だすわね」

女性の出す食事は残り物と思えないほど、たっぷり出されて、たくさん種類があった。

「私の名前はハツ。旦那はゲンジ。あんなに無表情だけど、実は凄く女に弱いのだよ」

そっと耳打ちするように言うハツ。ゲンジと呼ばれた先ほどの男もまたムツと表情を深くする。

「いやあ私たちお見合い婚だったんだけどねえ、この人ったらずーっとこの顔なもんだから、私言ってやったのよ、『そんなんつまんない顔ばっかしてるんなら、私出ていきます』ってね。勿論冗談よ？そしたら真顔で謝ってくるものだから、もう可笑しくて可笑しくて、ねえ、アンタ」

面白そうに爆笑するハツに、タキも少しゲンジに悪いと思いがながらも笑う。千代は飯にがつついていた。

「ねえ、あなた、名前なんて言うの？」

不意にハツが千代に名前を聞いた。がつついていた手が突然呼ばれたことに驚いて止まってしまった。

「わ、わたし千代！　そんでこっちがタキくんって言うのよ！」

あんまり大きな声で言うから、言い終わった後に周りがやけに静かに思えた。

「良いお嫁さんになれそうね！」

あっぱはつはと笑うハツ。千代はまた撫でられて、また少し恥ずかしそうに笑っていた。

「んで、あんたたち旅人って言ったけど、何か探してんの？」

そらきたと言わんばかりに、当たり前な問いだった。

「あー：はい」

そこは濁す。本当はただ、逃げているだけだけど。

「何を？ お宝とか？」

「まあ、そんなところですよ」

「良いわねえ。男の子はちよつと腕白なくらいが良いのよね」

それ以上ハツは深く話を掘り下げようとはしなかったので、表情には出さないが少なからず安堵を感じていた。

「ねえ、千代ちゃんってタキ君の妹？」

旅の目的を詳しく聞かれなかったのには幸いだったが、次にはこれ。

「ああ、違います。」

「じゃあ子ども？」

「いえ、血さえ繋がっていやしません」

「あら、じゃあどういう間柄なの？」

そろそろ人さらいかと怪しまれ始める。人さらいは重い罪だから。

「いや何、お恥ずかしい話ですが、千代が俺の親のようなものなんです。な、千代」

「うん、だってタキくん一旦落ち込むと、私が撫でてあげないとずうっと静かなのよ。」

そうすると私つまんない。ハツとゲンジの馴れ初め話に酷く似通ったようなそれに、タキは恥ずかしく思ったらしく、少しだけ怒ったように千代の名を呼んだ。

「だって本当のことだよ」

「だからって言わなくても良いことを…」

ハツは勿論、ゲンジも少し噴き出した。

和やかに、他愛の無い話は終わりを迎えようとした。

「じゃあ二人の床の準備でもしましょうね」

「ああ、すいませんわざわざ」

ハツがその場から去ったことにより、必然と、ゲンジとの会話き

りになった。

「ゲンジさんはハツさんのこと、どう思ってたりますんですか？」
見合い婚とは聞いていたが、予想を裏切るくらい仲が良さげなその様に、タキは少しの野暮を含めて言った。

「ありゃ女じゃねえな」

先ほどタキ達の会話に噴き出したゲンジくらい、タキも噴いた。

「でも悪くないんじゃないですか？」

「…上々だな」

おっと惚気だ。そうは思ったが、口には出さず、ただ腹の底で笑っていた。

最初の印象とは打って変わったゲンジとの会話をしていたタキだが、やはり素直に思ったことがあった。

（幸せそうだな）

良い人たちに巡り逢えた。自分の自己中心的な思いから始まったこの旅には勿体ない御裾分けだった。

良い人が幸せなのは、とても良いことだ。なんとも安寧で、なんとも素敵なことだ。

タキは窓の方の景色へ顔を向けて、そう思い耽った。

第四話

と、視線を向けた先に、さっき森へ向った少年が、とてつもなく大きな妖気を纏いながら戻って来たのを見つけた。

その大きさは、人が、纏って良い妖気の容量を超えていた。

「シノブ…」

何時の間にやらゲンジも外を見ていたらしく、少年の名前と思しき言葉を呟いた。

「シノブ君って言うんですか？」

「…ああ」

もともと強面気味な顔をさらに渋くして、ゲンジどこか哀れそうに言った。

「こんな夜中に、親に何か言われないんですかね」

「シノブに親はおらん」

禍々しい程大きな妖気を見ながら、その言葉に納得した。

だってその気配の中に、寂しさが見え隠れしていたから。

「病気ですか？」

纏う妖気に、不思議と誰かに対する憎しみだとか、そういうものが無かったからだ。それに農耕には何かと微生物が付きまとう。全てが全て良い微生物とは限らない。必ず雑菌というものが存在していて、その中にもさらに人間に病をもたらす菌が在る。体の弱い人間だったら死んでしまうことは判っていた。

「じゃあ両親とも病気で」

「ああ、違うな。シノブは片親なんだよ」

産まれた時から母親しか知らない。

シノブの母は家出人であった。何を思ってたか知らないが、この山中に逃げて来たようだ。そのとき既に身重の身であったその母親を、ハツは持ち前の世話焼きで、どうにかしてやろうとゲンジにそその

かしたことに始まり、次いで哀れに思ったゲンジは、元々使っていなかった稲穂を収納するための離れを改築してやって母親を住まわせた。

何度も何度も感謝を言う母親に、ハツ達もまた何度も替わりに元気な子を産むんだよと返した。やがて産まれたその子供。母親にはあまり似ず、どうとも父親似であろうその子には、『シノブ』という名が付けられたのだ。

「良い母親だったよ。耕作をするには少し軟弱だったが、それでもシノブが手伝っていたからね」

懐かしむように言うゲンジを見て、ああきつとハツたちもシノブのことを我が子の様に思ってるに違いないと、そう感じた。

「あんなふうに夜中徘徊するようになったのも、母親の骨が盗まれたその晩からだ」

一気に雲行きの怪しくなった話の内容に、タキは片眉をあげた。

「墓荒らしですか」

「判らんな。こんな村に賊の目ぼしいものなんてないだろう」

「盗まれたのは骨だけなんですか？」

「さあ……。お前さんのような流浪人が突っ込む話でもないだろう」それはそうだが、それでもやはり事情を知った身。わざわざ何かをしてやろうとは思わないが、判っていないながら無かったことにするほどの冷酷さをタキは持ち合わせていなかった。

「はい、準備終わったわよー！」

ハツのタイミングが都合良すぎだと思うのは、少々強引だろうか。

第五話

ハツが敷いてくれた、硬い布団の中に入った頃。千代がタキに呼びかけた。

「ねえタキくん」

「何だい、千代」

「…暑い」

千代は極度の暑がりで、極度の低体温の持ち主であった。見目は普通の子供だが、一度その手を握れば判る、その異常な体温。少し血色の足りない白い肌、そして冷たいお前の手。

タキはそんな千代の体調を何より気にかけていた。

「ああ、千代は暖かいのが苦手だからね。待っていな、氷をあげる」
「うん」

容易くそんなことを言うけれど、このような村で氷なんてものがあるわけではない。何故なら季節は残暑も過ぎた秋。山頂に有ったであろう名残雪など、とうに溶けている。

タキは何事もないように羽織を手を取った。絵羽織の裏地からいきなりにゆつと、妖気の纏ったあるモノを千代に差し出した。

それは氷のようなモノで、氷ではない。妖気を固形化したモノで、酷く冷たかった。

タキはそれを『氷』と言っているし、千代もそれが氷というものだと思っている。ただそれは、水が固まったモノじゃないだけ。

千代にとって『普通の氷』は温いものだった。しかしその『氷』は千代にとっても、冷たくて気持ち良いもの。ただタキには、普通の人間にとっては、その『氷』は、冷たすぎるものだった。

赤くなってしまった左手に気づかれないように千代の首筋に宛がう。普通の人間ならば、宛がわれた首筋が冷たさに焼き切れてしま

うところだろう。

「タキくん、ありがとう」

「どういたしまして」

タキは自分の体より何より、千代が大切だった。もう、供に居られる幸せを、失くしたくなかった。

「タキくん」

「今度は何」

「きつと、さっきのお話の子、お母さんのこと、悲しんでるよ」

千代のためなら、何だってできた。

「：そうだね」

その会話を最後に、千代は眠り、タキは何かごそごそと明日に向けて用意をしてから眠った。

そして夜はゆっくりと、朝に塗り替えられていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513e/>

千の代わり～君が居た～

2011年1月2日02時39分発行